

Title	雑誌『史学』のうまれるまで
Sub Title	A memoir : an early history of "Shigaku"
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.107(605)- 112(610)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	史料紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雑誌『史学』のうまれるまで

松本芳夫

何事によらず、物がはじめてできたり、つくられたりするには、それだけの条件がそなわるとか、機運が熟するとかのことがある。であつて『史学』の創刊についても、その点を顧みなければならず、そのためには、必然に史学科の充実発展とか、三田史学会の活動について、のべなければなりません。

しかるに、それらを知ることのできる三田史学会の記録が、不幸にも一九二三年（大正十二年）の関東大震災の時焼失してしまいました。聞くところによると、その後の記録も失われているとのことです。史学においては、記録や文書の貴重なことをやかましく説くのに、史学科や三田史学会の活動を直接知ることのできる根本史料の記録を失つてゐるということは、まことに遺憾にたえません。

ところが幸いなことに、史学科創設から初期の活動については、三田評論の前身である慶應義塾學報に記載されていて、慶應義塾百年史の別巻（大学編）には、それを利用して三田史学会の発足を記述しています。それによると、一九一〇年（明治四十三年）文学科は、文学・哲学・史学の三専攻に分かれ、それにつれて三

田史学会が誕生しました。同年二月五日三田文学会の主催で史学講演大会が開催されたが、この時にはまだ三田史学会が発足していないなかつたからであります。同年四月史学科の授業が開始され、五月二十八日三田史学会第一回例会、ついで六月十八日、第一回講演大会が催されたが、それらをふくめて翌年二月にいたるまでに、例会五回、講演大会三回の記事があり、また見学旅行は、一九一二年（大正元年）十月十七日から五日間、箱根・伊豆地方に行つたのが、第一回とされています。以上の講演大会には、塾の教授ばかりでなく、塾外の史学の大家も参加されています。その詳細のことは、同書をみていただきたい。

しかしそのころの史学科は、学生がいたつてすくなく、第一回卒業生は一九一三年（大正二年）石川一太郎君、第二回生一九一四年（大正三年）間崎万里君、第三回生一九一五年（大正四年）醍醐権一君、第四回生一九一六年（大正五年）鈴木錠之助君であつて、一九一七年・一八年には卒業生がなく、一九一九年（大正八年）第五回生として私ひとりが卒業しました。このような状態であつたから、発足当時の旺盛な活動も、その後いささか振わな

くなつたようで、学報における史学科の記事も、一九一一年（明治四十四年）どまりとなつてゐるから、研究会も中絶してゐたようです。

それで、これからお話しすることは、一九一四年（大正三年）私が入学して以後のことであります。それも私個人の日記などによるのであるから、精確を保しがたいうらみがあり、また四年前私が教授を退任した時、史学科回顧談をなしたが、それと重複するところもあるであろうし、なにしろ私の経験を中心としてのべるので、私じしんのことを語ることも多かるうとおもいますので、この点はあらかじめおことわりして、おゆるしを願つておきます。

年の若い時は、未来に対する前進があるだけで、後をふりかえる必要もなく、また回顧するだけの過去をもたないが、年をとるに従つて前進がにぶり、おのずから過去をふりかえりみることの多くなるのは、人生のつねであります。と言つても、私はみずから老人ぶることを好むのではありません。しかし私が慶應義塾大學に入学したのは、今から五十数年の昔であつて、今日とは社会状勢においても、学制においても、いろいろの点で非常なちがいがあります。それで、ついでながら当時私のうけた修学についてのべてみたい。それは史学科の歴史の或る時期の状態をしめすとともに、今日と比較して非常に興味があるとおもいますから。

今日外部から大学に入学するには、入学試験の難関を突破しなければならないが、私は九月の補欠で、無試験で入学をゆるされたので、入試の苦しみをしなかつただけでも、有難いかぎりです。

さて私が予科で修学した課目は、一年では英語（訳解、会話、作文）、英文学、独語、国語、論理、歴史などで、史学科学生は、これ以外に地理を修めねばなりませんでした。一年では新たに心理と漢文が加わり、また史学科学生は、法学通論と経済原論とをよけいに修めねばなりませんでした。歴史は一、二年を通じて西洋史の英書をもちいました。当時は日本史も東洋史も、予科ではありませんでした。

予科時代に史学科学生は、私以外に二三名あつたけれども、本科にすすんだ時には私ひとりであります。上述したように、当時の文学科には、今日のような細い専攻別がなかつたから、史学科では、国史も、東洋史も、西洋史も、すべておなじように修学しなければなりませんでした。これは学問の分化した今日とはちがつた点で、細かい研究に不利であつたけれども、ひろい視野を養う利点がありました。

つぎに本科三年を通じて教をうけた教授と課目についてのべ

ましよう。田中翠一郎教授から、史学研究法として、ベルンハイムの史学入門の原書の講読、東洋史として、元と明との歴史、列国政治史としてヨーロッパ各国の歴史、政治学として、ゲットルの政治学序説の原書の講読、さらに課外講義として、チエスター・トンの文学におけるビクトリア時代の原書、チーグラーの十九世紀のドイツ思潮史の原書、清魏源の聖武記十四卷、甘泉江藩の国朝漢学師承記等の講読。

占部百太郎教授から、セイニヨーボの中世の文化史と、ブライスの神聖ローマ帝国の英書講読、阿部秀助教授から、西洋史の講義と、課外講義として、シユミットの世界商業史の原書の講読。

幸田成友教授から、三年間を通じて、古代から近世にいたる国史概説、伊木寿一教授から、国史と古文書学の講義、橋本増吉教授から、三年間を通じて東洋史概説の講義と、課外講義として、書經と清趙翼の二十二史劄記三十六卷の講読、加藤繁教授から、支那社会経済史の講義。船田三郎教授から、歴史哲学の講義。またカントの永遠の平和と、リッケルトの文化科学と自然科学との原書の講読。川合貞一教授から、普通心理学と民族心理学との講義。またショウペンハウエルの意志と表象としての世界と、ニードエのツアラッストアの原書の講読。小林澄兄教授から、デヴィドソンの教育史の原書の講読。稻垣末松教授から、各科教授法。林毅陸教授から、歐米近世外交史。福田徳三教授から、日本經濟史の講義をうけました。

なお予科で教をうけた教授のうち、英語・英文学のプレフェー

ア、野口米次郎、戸川明三（秋骨）、畠功、独語の向軍治、国文の神戸弥作、漢文の国府種徳（犀東）の諸氏は、とくに印象ふかくのこつています。

予科本科を通じて、当時の課目は、すべて必修であつて、選択は一つもなく、本科の或る学年であつたが、土曜日午前八時から午後五時まで、しかも昼の時間に課外講義があつて、私はたゞひとり九時間の講義をうけたことがありました。なにしろ学生は私ひとりであつたから、勝手に休むわけにゆかず、おのずから勉強せざるをえなかつたが、えらい学者をひとり占めにしているような、ぜいたくな教育をうけたことを有難くおもつてゐます。こんなことは、今日ではとても見られないことです。各教授の風格や教授ぶり、或は逸話など、話したいことがあるけれども、これらは他の機会にゆずります。もつとも、そのうちのいくつかは、かつて『三田に輝く三色旗』において、史学科今昔談としてのべてあるから、見ていただきたい。

つぎに私の参加した史学科の行事について、記録体に簡単にのべます。

○一九一五年（大正四年）十月二十一・三・四日、日光見学旅行チエのツアラッストアの原書の講読。小林澄兄教授から、デヴィドソンの教育史の原書の講読。稻垣末松教授から、各科教授法。

鈴木鎌之助（本三）松本芳夫（ヨ二）

○一九一六年（大正五年）秋、見学旅行（高雄山（一泊）—川越）教師伊木寿一、学生、松本芳夫（本一）松本信広（ヨ一）。

○一九一七年（大正六年）五月七日、史学研究会（一時中絶して

いたのを、この時再興す)田中萃一郎教授の話。

ついて】松本彦次郎講師

○
“
五月二十一日、史学研究会「流行唄と

○
“
五月十四日、史学研究会

小唄 松本芳夫（本） —グリーンについて— 占部百太郎教授

六月十三日，史學研究會

○ “ 授の話
十月十一日、史学研究会「歴史について」飯田忠純（ヨ一）「名古屋における米の取引状況」川上多
力講師

九月十四日 哲学科と史学科との教授
学生が万来舎に会合して、雑誌発行について談合、百五十頁位のもの、年三回発行、雑誌名は投票の結果「三田批判」と決定、しかし案は実現しなかつたけれども、雑誌発行の要望のつよまつてきたことを示すものであつた。

泊)一横須賀)教師田中萃一郎、伊木寿一、学生松本芳夫(本二)
武田勝蔵(本一)荒井真二(本一)

○ 橋本増吉両教授の「支那旅行談」
○ “ 十月十四日、史学研究会
十月一日、史学講演会。

「いて」松本芳夫（本一）「范氏義莊規矩について」田中萃一郎
教授

○
十一月一日、見学旅行（鷺宮一大宮（一泊）—吹上—忍町—熊谷—長沼（一泊）一大宮）教師、田中萃一郎、伊木寿一、占部百太郎、阿部秀助、船田三郎、幸田成友、

十一月二十一日 史学研究会「満洲旅行談」松本信広（本一）「最近の英國の改革について」占部百

○ 学生松本芳夫（本三）松本信広（本二）武田勝蔵（本二）
○ “ 十一月十一日、史学研究会「山路愛山
の神道論」、「二公本芳夫（本三）「南宋公田考」和秦終改

○一九一八年（大正七年）一月十六日、史学研究会
“”
一月三十日、史学研究会

授

○
二月十三日、史学研究会「蘭人のみた

十一月十六日、史学研究会

○
“る島原の乱について” 松本芳夫（本二）
四月三十日、史学研究会「我がの座て

○一九一九年（大正八年）一月二十一日、史学研究会「卒論、神代史研究序説」にて、松本芳夫（本二）

二月四日、史学研究会

二月十七日、史学研究会

五月五日、史学研究会

○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○
五月十一日、見学旅行（池袋—坂戸—
越生、法恩寺—西平、慈光寺（一泊）—高麗村—飯能、天覧山）

教師、田中萃一郎、橋本増吉、鈴木錠之助、松本芳夫（商工
学校教師）学生、松本信広（本三）武田勝蔵（本三）荒井真一

（本二）飯田忠純（本一）山本光郎（本一）

○ ○ ○ ○ ○
六月十六日、史学研究会

○ ○ ○ ○ ○
六月三十日、史学研究会、松本彦次郎

○ ○ ○ ○ ○
講師の六高へ転任の送別会
九月一十三日、史学研究会

○ ○ ○ ○ ○
十月八日、史学研究会

○ ○ ○ ○ ○
「Vanderlip ○ What Happed to Europe の紹介」松本芳夫

○ ○ ○ ○ ○
十一月五日、史学研究会

○ ○ ○ ○ ○
十一月十九日、史学研究会

○ ○ ○ ○ ○
十一月二十六日、史学研究会「正倉院
拝観談」幸田成友教授

○ ○ ○ ○ ○
○一九一〇年（大正九年）一月二十一日、史学研究会、滝本誠一
教授の話

○ ○ ○ ○ ○
武田勝蔵、荒井真一三君の卒業送別会、これ以後の卒業生は、

毎回すくなくとも一人以上となつた。史学科の学生がしだいに

雑誌『史学』のうまれるまで

増加したことを示す。

○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○
四月十五日、三田史学叢書第一編とし
て、松本芳夫著「神代史研究」刊行、しかし出版社の倒産のた
め、叢書は続刊されなかつた。それがまた雑誌発行の要望の念
をつよめた。

○ ○ ○ ○ ○
六月二十五日、史学研究会

○ ○ ○ ○ ○
九月十七日、史学研究会

○ ○ ○ ○ ○
十月十日、見学旅行（松山の百穴）教
師、田中萃一郎、古部百太郎、間崎万里、松本芳夫（商工学校
教師）松本信広（普通部教師）武田勝蔵（宮内省）飯田忠純（本
三）恒松安夫（本一）高橋琢一（本一）今宮新（本一）伊丹栄

七郎（本一）

○ ○ ○ ○ ○
十月三十一日、見学旅行（伊豆垂山—

大仁—修善寺（一泊）—小田原・湯本早雲寺—堂島（一泊）—箱根
神社—大湧谷—強羅）教師、田中萃一郎、幸田成友、阿部秀助
橋本増吉、鈴木錠之助、松本芳夫（商工学校教師）その他六名

○ ○ ○ ○ ○
十一月二十六日、史学研究会「正倉院

○ ○ ○ ○ ○
十二月八日、史学研究会、地人会合同

○ ○ ○ ○ ○
「アイヌについて」バチャエラーフ、出席者、田中萃一郎、川合

貞一、田中一貞、柳田国男、移川子之藏、阿部秀助、内藤智秀
小沢愛圓、間崎万里、鈴木錠之助、松本芳夫、松本信広、その
他十一名

○ ○ ○ ○ ○
○一九二一年（大正十年）二月二十五日、史学研究会、飯田忠純

山本光郎、加藤峻三君の卒業送別会、出席者教授その他十六名
学生十名

○ "

五月五日、史学講演会（ナポレオン百年忌記念）「開会の辞」田中萃一郎教授、「ナポレオンと印度遠征」阿部秀助教授、「ナポレオンの性格」長瀬鳳輔氏

講演終って後、万来舎で晩餐をともにし、その席上、雑誌発行の計画を提起して一同の賛同を得、会員募集のことなどを議した。その以前から松本信広、飯田忠純、松本芳夫等は雑誌発行のことをひそかに議していた。

○ "

六月九日、史学研究会

○ "

九月二十二日、史学研究会「民主政治について」田中萃一郎教授

以上は『史学』のうまれるまでの史学科、及び三田史学会の活動を、私の日記などによつてのべたものであるが、その不備のために、例会の月日だけで、研究発表者の氏名の不明であるものがあるのは、まことに遺憾です。なお『史学』を生む氣運をつよめたものとして、地人会の活動もあげておきたい。この会は、移川子之藏、小沢愛闇、松本信広、松本芳夫の四名が同人となつてつくつたのであって、人類学、民族学、考古学、民俗学、或は人文地理学などの研究会であります。その例会をみると、一九二一年（大正十年）二月九日「南紀の風俗」松本芳夫、同三月八日「社稷について」松本信広、「結婚の進化」川合貞一、同四月二十八

日「琉球の文献」柳田国男などがあります。地人会の主たる研究は、史学の補助学であり、その同人は三田史学会の関係者であるから、いわば三田史学会の弟分とも言つてよく、従つてその活動は三田史学会とは無縁ではありませんでした。

かくて雑誌発行の気運が熟し、その準備がととのつて一九二一年（大正十年）十一月三日『史学』第一巻第一号が創刊されました。表紙の史学という文字は、加藤繁教授が、中国の古い文字から選らばれたものであり、発刊の辞は、私が執筆しました。同月二十日の大阪朝日新聞は、早速『史学』創刊を紹介してくれ、また十二月一日発行の「日本及日本人」誌上で、三井甲之氏も紹介してくれたように、『史学』の創刊が各方面に反響があつたとおもいます。長い間の苦難を経て、今日めでたく四十巻を完了したことによろこぶとともに、さらに将来の発展を祈つてやみません。
(これは昨年五月十四日『史学』四十巻の刊行記念の時にのべた話を補訂したものです)